

## 父の話

ある中学校でいじめがひんぱんに起こりました。吉田さんもいじめられた生徒の一人です。そのとき、吉田さんのお父さんが、いじめや差別のない学校にしていくことを願って、生徒たちに自分の経験を話すことを引き受けました。

みなさん、こんにちは。

今ほど、ご紹介いただきました吉田です。

みなさんとは、時々PTAの行事などで顔を合わせていますね。時に「ムツゴロウさん」などと呼ばれています。今日は動物のお話ではなく、人権週間にちなんだお話ということで、少し私の経験したことをお話ししたいと思います。

みなさんが、人権について考える手助けになればと思いますので、よろしく願っています。

私は法律事務所に勤めています。みなさんは法律や裁判といっても、あまり身近なものとは感じないかもしれません。テレビで、たまに殺人事件などの裁判を放映していることがありますが、もちろんそういう重大な事件もありますけれども、身近なところでは青少年の非行問題があったりして、同じ年ごろの子どもを持つ親として、いろいろ考えさせられることがあります。

何年前か、学校がすごく荒れた時期がありました。そのころだったと思いますが、高校生のいじめ事件がありました。仲間の一人が生意気だと言って一人の子の髪にカラスプレーをかけたり、その子の髪の毛を切ったりする事件でした。ほんの少し友だちを思いやる気持ちがあれば、自分がいじめられる立場になつた時どういう気持ちになるか考えたら、こんな重大な結果にならずにすんだのか、そう考えた時

に、自分の子どもがこのことが浮かんできました。

私は生まれた時から、右耳がありませんでした。右の耳の穴がふさがっていて、耳たぶなどがなくて、ただかたまりがあっただけの状態でした。それで、お医者さんに人工の耳を作ってもらって、つけていました。そう、みなさん、レストランのウインドウに模造品が飾られていると思いますが、それと同じように、耳の形を作ってつけていたのです。

保育園のころはそれをからかわれたという記憶はありません。けれども、小学校に入学してからは、人工の耳をはずされて、小泉八雲の小説に「耳なし芳一」という話がありますが、そう言うてからかわれるようになりました。この時、私をからかっていた人たちは、耳がないことが不思議で、それを見るのがおもしろかったという軽い気持ちからだったようです。こちらがとても傷つき、とてもいやな思いをしていることなど、何も感じていないようでした。

先生が注意してくれたので、さすがに耳をはずされることはなくなりましたが、それでも私の近くにきて「耳なし芳一」と言うてきたので、私も我慢できずに立ち向かっていきました。なぐり合っているうちに、いつしかそのころプロレスではやっていた「四の字固め」の技をかけたところ、はずれなくなつて日が暮れるまで、教室の中をはいずり回っていました。見回りにきた先生のおかげで、何とかはずしてもらつておさまりました。このことがあつてから、その子から「耳なし芳一」と言われることはなくなつたように思います。

ところが、小学校の卒業近くになつて、周りの目が気になりだし、だんだんと引きこもりの状態になつてきました。卒業式の総練習という大事な日、呼びかけをしなくてはならなかつたのですが、欠席し、みんなに大変な迷惑をかけてしまいました。卒業式当日は、何とか出席することができたのですが、ほとんど家から出ることはありませんでした。

中学校入学後は、目立って欠席するようになりました。先生も親も心配しているので、自分でも、学校へ行かなければいけないことはわかっていたのですが、朝になると行けなかったのです。最初はどうか自分でもよくわからなかったのですが、今から考えると、中学生になって、他の小学校の人たちと一緒にいると、自分の耳のことでいろいろと変な目で見られるのではないかとという恐怖心があつて、学校に行けなかったのだと思います。同じ小学校の仲間たちは、私の耳のことはわかつてくれているけれど、他の小学校の人たちはどう思うか、またいじめにあうのではないか、という気持ちだったのではないかと思います。自分だけ、何で耳がひとつしかないのだろう、自分は全然悪くないのと思ひ悩んでいたように思います。

学校の先生方やまわりの人からもいろいろ気づかっていたいただきました。

「吉田さんよりもっと重い障害のある人で、元気に生きている子はたくさんいるんだ。」  
などと、よく言われました。

でも、心の中では、  
「健康な人には、ぼくのことなんか絶対に分からないんだ。」  
という気持ちで、とても素直に人の話を聞く気持ちにはなれませんでした。それで、一学期はかなり欠席があり、学期末に校長先生から、「このままの状態が続けば進級できない。もう一年、中学一年生をやつてもらわなければいけない。」  
とまで言われました。

そんな中、両親が何とか耳が治らないかと心配し、私は両親と一緒に、夏休み、東京の病院へ行って診てもらいました。そして、二学期に手術を受けることになりました。私の耳は全く正常で、穴がふさがつていただけだから、耳の穴をあければよいということでしたが、耳は脳とつながっていて、手術は大変だということでした。中学生は成長

の途中だから、もっと大きくなって手術したほうがよいということ、今は簡単な手術にとどめようということになりました。

入院中に考えたことは、校長先生の言葉でした。

「このままでは一年遅れることになって、同級生と別れてしまうことになる。いじめられたけど、一緒に楽しく遊んだ仲間がいっぱいいる。その仲間たちと別の学年になるのはとてもつらいことだ。」  
と思いました。

そして、クラスのみんなから手紙と千羽鶴が送られて、ますます今の友だちと別れたくないという気持ちが強くなりました。あの時、退院したら学校へ行こうと、強く決心したのではないかと、今そう思います。

いよいよ退院して、初めて教室に入ったときも、みんな温かく迎えてくれて、その時何か胸の中がスーッとしました。それから、高校、大学と進む中で、環境の違う場へ行つても、まわりの目をあまり気にせずに、過ごすことができるようになった気がします。

私はいじめられたことで、小さなころとてもいやな経験から、いつもいじめがなくなつてほしいと思つていました。そんな私がハツとしたことがあります。それは私の友人のことです。



私には小学生のころから仲のよい在日朝鮮人の友人がいます。彼は勉強もスポーツもよくできる子でした。大学の時だったか、彼と子どもころの話をしていて、彼が

「おれも朝鮮人ということ、いやなことを言われた。おまえの気持ちはどうわかっていた。けれど、自分がまた何か言われるかと思うと、何もしてやれんかった。」

と言ってきたのです。

彼も私も立場は違ってもいろいろと悩んでいたのです。そんな彼が高校へ入って新しい友人ができたのですが、自分が朝鮮人だということが知れると、その友だちが離れていってしまうのではないかと、すごく気になってきました。それで、何かの折に自分から朝鮮人だということと打ち明けたそうです。そうしたら、その友人は

「日本人とか、朝鮮人とか関係ないんや。おれはおまえと一緒に遊んでおもしろいんや。おれたち友だちやろ。」

と、言ってくれたそうです。私はこの話を聞いて、「これだ。」と、思いました。その友人は自分のまわりの人を差別するのではなく、一人の人間として接することのできる人なんだと思いました。

今日、みなさんに私の経験をお話ししてきましたが、今思うことは、誰にでも欠点があり、また自分自身の中に気にしていることがあるということ。天然パーマであることや、ほくろ一つでも、その人にとっては大変なことであり、ほんの軽い気持ちで言った言葉が相手を傷つけてしまうのです。そしてそれがエスカレーターすると、人の命まで奪ってしまうことになります。

特に中学生時代は、精神的に成長する時期でもあり、自分やまわりのことを気にしたりいろいろ考えたりするようになってきます。そんな中で相手を思いやる気持ち、自分も大切にすることを思っています。それが人権を尊重することのなるのではないでしょう

か。

いじめも差別です。心に差別の意識があるからだと思います。差別の問題は歴史的にも大きな問題とされ、みなさんも歴史の授業で学んでいると思いますが、その一例が人種問題や男女差別で、それらの不当性は歴史的にも明らかです。その中でも奴隷制度の禁止や男女平等は法律で認められてきました。

でも、身のまわりの小さいいじめはなかなかありません。言葉でいくら立派なことを定めても、一人ひとりの意識を変えなければ、いじめをなくすることは難しいと思います。これからみなさんが成長していく中で、進学、就職と経験する中で、常に新しい人間関係が生まれます。人のいるところには必ずといっていいほど、差別の芽があります。でも、その差別の芽をなくするのは、一人ひとりの心や意識次第だと思います。どうかお互いの気持ちを思いやって、人を認め、人の命、自分の命を大切にして、差別をしない人になっていただきたいと思えます。

これで私の話を終わらせていただきます。ありがとうございました。みなさん、これからも部活動、勉強に友だちと一緒にがんばってください。

#### 考えてみよう

①吉田さんのお父さんは、学校からいじめがなくなることを願って、生徒たちに話をすることを引き受けました。あなたはこのお父さんの気持ちをどう感じましたか

②傍線部の箇所について、あなたはどのように思いますか。また、同じようなことを感じた経験があれば、具体的に書いてみましょう。

③あなたは、自分のお父さんやお母さんが子どものころ経験したいじめについて話を聞いたことがありますか。お父さんやお母さんは、いじめについてどう思っているのか聞いてみましょう。

# 父の話 (中学生向け)

## A 教材設定の理由

いじめは、いじめられる側の痛みを感じとれない人間の心の貧しさによって起こる。いじめる側にも抱えている課題があることはいうまでもないが、両者の間には、同じ学校や社会で共に生活しているという共生感を失い、寂しい人間関係になってしまっている。

吉田さんのお父さんは、わが子もいじめられる生徒の一人になっていることに心を痛め、自分が体験したいいじめを生徒たちの前で語る。その話の中には、子どもの頃から「いつもいじめがなくなつてほしい」と思っていました。「という気持ちがあふれている。いじめも差別であり、人を差別するのではなく、一人の人間として接してほしいと訴えるのは、生徒たちがお互いを大切にす豊かな人間関係を築いてほしいという願いからであった。

生徒のみんなに伝えたい気持ちとして、「お互いの気持ちを思いやつて、……差別をしない人になつていただきたい。」と語り吉田さんのお父さんの話は終わる。いじめのつらさを体験し、人を差別するなと語る大人の話、生徒たちには真摯に受けとめてほしいと思う。その気持ちを少しでも感じる中で、自分自身のあり方を生徒たちに考えさせる機会にしたい。

## B 教材の解説

本教材は、県内のある中学校で、生徒どうしのいじめが多発したとき、何とか解決しようと試みたとりくみの一つを教材にしている。

吉田さんのお父さんは、PTAの役員をしながら、生徒たちとかかわってきた。生徒の間にいじめが続く中で、吉田さんの息子さんもおいじめにあう。生徒どうしのいじめに心を痛めていた吉田さんのお父さ

んは、自分が子どもの頃いじめられてつらい思いをした経験を、自分の息子も含めた生徒たちの前で話そうと決心する。

自分の右耳がないことを理由にからかわれいやな思いをしたこと、小学校卒業時から中学校にかけて周りの目が気になり引きこもつたような状態になり元気をなくしていったこと、それでも手術を受けるときにはクラスのみんなから励まされ、退院して教室にもどったとき、温かく迎えてくれたことに胸がスーッとして元気が出てきたことなど、いじめられたときのつらさから、いつもいじめがなくなつてほしいと思つてきたことを語ります。

また、小学校時代から仲のよい在日朝鮮人の友人が、自分自身の悩みを打ち明け、差別しない人間との出会いに励まされたことに吉田さんのお父さんも強く共感したことを語ります。

本教材は、そういった父の話聞き入る息子の目を通して考える教材として構成した。授業では、教師の姿勢として、教訓的に内容を伝えるのではなく、父の話に聞き入り気持ちを感じ取る子どもの視点を大切にして進めたい。

父の話聞いた吉田さんは次のような感想を記している。

人権の話があつて、話をしたのは、ぼくの父でした。父が来たとき、ぼくはドキドキしました。どんなことを話すのかなあ、と思いました。父が耳のことで、子どもの時、いじめられていたことは、はじめて知つて、ちょっとみんなとちがうけれど、ふつうとかわらなくて、ぼくにとつても、姉にとつても、みんなにとつても、あたりまえのことだったからです。父は一人ひとりが周りの人のことを思いやれば、いじめはなくなる、と言っていました。

ぼくも「くさい。」とか言われたり、便所までついて来られて、いやな気持ちになった。なんでそんなことまでせんなんが、自分がされたら、いややと思うはずなのに、と思つた。

### C 指導上の留意点

本文は、生徒におこなった講話を採録したものであり、教材文としてよくある物語として構成されていない。授業を進める際には、生徒が「父の話」に聞き入り、気持ちを感じ取っているような雰囲気大切にしたい。

### D 参考資料

・二〇〇一年度「人権週間のとりくみ報告」から

E 授業の展開例

教師の基本発問・助言	学習内容・支援の要領
<p>1 導入</p> <p>①今日の授業は「いじめ」について考えます。自分がいじめられたり、他人をいじめたりしたときの気持ちを思いだしてください。</p> <p>2 展開</p> <p>②教材文プリント「父の話」を配布し、その背景を説明する。</p> <p>③教師が範読する。</p> <p>④考えてみよう一 お父さんの気持ちをどう感じましたか。また、なぜ引き受けたと思いますか。</p> <p>⑤考えてみよう二 自分は軽い気持ちで言っているのに、相手が傷つくことがあるということ想像できますか。 人の命まで奪うことがあることを想像できますか。</p> <p>3 まとめ</p> <p>⑥考えてみよう三 吉田さんは、父のこの話で初めて父親の子ども時代のことを知りました。自分の両親からこういう話を聞いたことがありますか。 この文をお父さんやお母さんに読んでもらい、感想を聞いてみましょう。</p>	<p>①教訓的にならないように、明るくさわやかな口調で語りかけたい。</p> <p>②教材文のリードを使って、背景を説明してもよい。</p> <p>③話をした吉田さんのお父さんの思いを感じ取りながら、気持ちをこめて読む。</p> <p>④わが子がいじめられつらかったこと、自分の子ども時代を思い出していたたまれなくなったこと、わが子や他の子どもたちがお互いに尊重する学校になっ てほしいと思ったことなど、感じ取らせたい。</p> <p>⑤生徒一人ひとりの「自分自身の中の気になること」に目が向くように配慮し、 自分のこととして考えられるようにしたい。 命を絶った事件について軽くふれることがあってもよい。</p> <p>⑥教師が自分の体験を語ってもよい。いじめる側、いじめられる側、どちらでもよいが、そういった体験を通して、人を大切にすることを学んだということとは押さえておきたい。</p>